

# NHK大阪において制作された電子音楽の調査

Survey of Electronic Music Composed in Osaka NHK (Japan Broadcasting Corporation)

川崎弘二(相愛大学)、松井 茂(IAMAS)

KAWASAKI Koji (Soai University) and MATSUI Shigeru (IAMAS)

## 1. はじめに

1952年からNHK東京では録音再生技術を用いた音楽の制作が本格的にスタートしており、1955年には黛敏郎により日本最初の電子音楽が放送初演されている。筆者は「情報科学芸術大学院大学紀要」の第8巻に「NHK東京において制作された電子音楽の調査(1952年～1968年)」と題した研究ノートを寄稿し、NHK東京が内幸町の放送会館にあった時代に制作された電子音楽の歴史的な記述を行った。

ただ、その数は決して多くはないものの、NHK東京だけでなくNHK大阪を始めとする各地方局や民間放送局でも電子音楽の制作は実践されており、その詳細についてはいまだ明らかになっていないのが現状である。今回「NHK番組アーカイブス 学術利用トライアル」というプロジェクトを利用し、NHK大阪において制作された電子音楽についての調査を行った成果についてここに報告するものである。

## 2. 調査方法

「NHK番組アーカイブス 学術利用トライアル」とは、NHKアーカイブスで保存している番組を学術的に利用する方法を検討するプロジェクトである。このプロジェクトは公募によって採択されており、NHK放送博物館(東京)やNHK大阪などでデジタル化された100万本におよぶ過去の番組を視聴することができる。筆者は2019年12月から2020年2月にかけてNHK大阪において番組の視聴と各種調査を行った。

## 3. 戦前のNHK大阪① 和田精

1925年3月1日から東京放送局は試験送信を、1925年6月1日から大阪放送局は仮放送を、そして、1925年7月15日から名古屋放送局は本放送を開始する。1926年8月20日にこれらの放送局は解散して日本放送協会(NHK)が設立されること

となり、大阪放送局は日本放送協会の関西支部の大阪中央放送局として新しいスタートを切った。そして、1926年12月1日にNHK大阪はようやく完成した新しい局舎から本放送を開始することとなる。

放送開始当初のNHK大阪におけるラジオ・ドラマでは、「主に道頓堀の五座(註・浪花座/中座/角座/朝日座/弁天座)と呼ばれる五つの芝居小屋の協力を得て(略)大体芝居の道具<sup>1)</sup>」を使用して擬音が作られていたようである。そして、1929年末には築地小劇場で効果や照明などを担当していた和田精がNHK大阪へと入局する。和田は東京放送局にて制作された日本初の本格的なラジオ・ドラマ「炭坑の中」で効果を担当した人物である。NHK大阪の放送部長であった煙山二郎は「放送芸術を確立するためにはぜひとも必要な人、というより、ラジオ・ドラマには欠かせぬ人<sup>2)</sup>」と考へ、効果音の神様とも称された和田を大阪へと呼び寄せたという。

1930年11月25日にはラジオ・ドラマ「都會の邂逅」が放送されており、この番組は「大阪中之島渡辺橋市電交叉点の街頭音を、当時の朝日会館の楼上、窓外にマイクを設置して中継<sup>3)</sup>」することが試みられている。当時は放送に使用できるスペースを持った録音機は存在せず、スタジオに入れることができない音響体の発する音は、当然のことながら電波に乗せられなかったわけである。和田らはその限界を乗り越えて、スタジオ外の音響をどうにかして電波に乗せようと努力を重ねていたのであった。

## 4. 戦前のNHK大阪② 純粹ラジオ芸術

1933年10月17日からNHK大阪では「詩の朗讀」という番組の放送が始まっている。この番組は「聴覺鑑賞に喚び醒し朗讀者による言魂とも云ふべき正しく美しい言葉の韻きに音楽伴奏を織交ぜて詩の精神を時間的に鏤刻したもの<sup>4)</sup>」であり、

1 NHK大阪放送局七十年史編集委員会編『こちらJOBKNHK大阪放送局七十年』日本放送協会大阪放送局(1995年5月)31頁

2 塩沢茂「人物でつづる放送史13 ラジオ・ドラマと和田精氏中」『東京新聞』(1965年2月25日)11面

3 辻好雄「BKの効果を探るラジオドラマの進展と共に」NHK近畿本部芸能部編『BKドラマ年表 1期 大正14年～昭和20年』NHK近畿本部芸能部(1979年3月)148頁

4 日本放送協会編『ラヂオ年鑑 昭和十年』日本放送出版協会(1935年5月)26頁

1934年9月24日に放送された第5回について南江治朗は「和田精氏の發案に依り(略)A・B二箇のマイクロフォンを(略)設置した。(略)朗讀者は詩の一行を二回宛同じやうに朗讀してゆき、その度毎に副調整室に於けるコントロール、パネルに依つてAとBとを順次に交互に活かしていつた。その結果としてAは普通の朗讀として聽かれ、Bからのものは前回のものが遠く廣く山野の空間にこだましてゐるかの如き聽取効果を得た」<sup>5</sup>と解説している。

また、1935年2月19日に放送された第7回では「川路柳虹氏が『夜の宿』で囚人の合唱とコップを叩きつける音を舞臺効果的に使用するなど、音響的な効果も追求されていたようである。NHK大阪の文芸課長であり「詩の朗讀」を立ち上げた奥屋熊郎は、この番組について「詩は自由なる表現の道を害はれず、音楽(又はサウンド・エフェクト)はこれを補ひ、これを粉飾し、これを誘導し、又これと協奏する役目を持つ。この形式が『詩』の藝術領域を擴大し、詩に対する一般の理解を深めることになる」<sup>7</sup>と主張している。

NHKの逐次刊行物「ラヂオ年鑑」の1935年版では「從來創造されたラヂオ独自の藝術としてラヂオドラマ、ラヂオ風景、ラヂオ物語があるが(略)特にラヂオ藝術の新生面として登場されたもの」<sup>8</sup>として「詩の朗讀」を挙げている。また、1939年に刊行された書籍「日本放送協會史」では「慰安放送種目の變遷には二つの大きな流れが見られる。一つは既存藝術のマイクロフォンへの移植とその保護助長の歴史であり、他の一つはこれ等既存藝術の領域とは別個な独自の純粹ラヂオ藝術創造の歴史である」<sup>9</sup>と述べられ、こちらでも「詩の朗讀」が後者の例として挙げられている。すなわち「詩の朗讀」は、ラジオでなければ表現することができない、音響による「純粹ラジオ芸術」という新しい分野を切り拓くための番組であったことが分かる。

## 5. 戦前のNHK大阪③ 放送におけるミキシング

1936年4月27日にNHK大阪では本居長世の作詞／作曲／演出／指揮による「抒情歌劇『夢』」が放送された。「放送」誌の1936年5月号には河上徹太郎／唐端勝／諸井三郎による鼎談「ラヂオ・オペラを語る會」が掲載されており、「記者A」と

いう人物が「實は日本ではラヂオのミキシングが未だ確立されてゐないやうです」<sup>10</sup>と発言すると、唐端は「機械の處理といふものが生殺與奪の權利を握つて居ますから、そこで演出家がミキサーを兼ねるなり、またミキサーが演出の仕事をするなりしなければ、いつまでも食ひ違つて参ります」<sup>11</sup>と苦言を呈している。

しかし、和田精は「放送」誌の1936年6月号において、以前よりNHK大阪では多彩なミキシングを実践していると反論した。たとえば1934年12月14日に放送された谷崎潤一郎の原作による「物語『春琴抄』」は、「第一放送室に岡田嘉子氏と松原操氏と、萬一に備へるために鶯の擬聲家とを置き、第三放送室に箏曲家菊原琴治氏と菊原初子氏とを置き、第四放送室に關西隨一と稱せられる名鶯を置いた。／フェーディングユニットは第三放送室の合の間に置き、硝子窓を通して各室との連絡を取りながら、各室のマイクロフォンを調節しミックスした」<sup>12</sup>と述べている。

また、1935年10月17日には山田耕筰の原案／指揮によるショパンを題材とした「ミユウジカル・ドラマ『愛の葬送曲』」が放送されている。和田はこの番組のためのマイクロフォンとして、セリフ用／ピアノ用／管弦楽と合唱用／擬音用の四台を使用し、とくにピアノの音量は「ショパンの部屋の中で弾かれる音量と、ジョルジュ・サントの部屋の中で聞えて来る音量とを區別する爲に、絶えずパネルが動かされた」<sup>13</sup>と説明している。すなわち、NHK大阪では複数のマイクロフォンによるミキシング技術を活かした、純粹ラジオ芸術の制作が進められていたわけである。

## 6. 戦前のNHK大阪④ 大阪放送会館

1936年12月12日からNHK大阪は新しく建設された大阪放送会館からの放送をスタートさせる。それは「地下一階、地上九階(塔屋を含む)の鐵骨鐵筋混凝土造近世式建造物」<sup>14</sup>であり、設備として「第一スタジオは一階から四階まで打ち抜いた約百坪ほどのものであって、大管絃樂、吹奏樂、大規模なラジオドラマ、大交響樂を相當なゆとりをもって行い得る(略)その他、四階に第十一、第十二、五階に第二乃至第七、六階に第八乃至第十のスタジオ」<sup>15</sup>を擁した大規模な建物で

5 南江治朗『放送文藝の研究』青朗社(1948年12月)82～83頁

6 奥屋熊郎『「詩の朗讀」放送覚え書下』『放送』5巻11号(1935年11月)84頁

7 奥屋熊郎『「詩の朗讀」放送覚え書上』『放送』5巻10号(1935年10月)122頁

8 註4、25頁

9 日本放送協會編『日本放送協會史』日本放送出版協會(1939年5月)214頁

10 河上徹太郎、唐端勝、諸井三郎「ラヂオ・オペラを語る會 抒情歌劇『夢』を中心に」『放送』6巻5号(1936年5月)45頁

11 註10に同じ。

12 和田精「放送に於けるミキシング」『放送』6巻6号(1936年6月)20～21頁

13 註12、18頁

14 日本放送協會編『ラヂオ年鑑 昭和12年』日本放送出版協會(1937年5月)17頁

15 日本放送協會編『日本放送史』日本放送協會(1951年3月)680頁

あった。

のちにNHK大阪の放送効果團に加わる辻好雄は、「ドラマの音響効果に就いては、エコーが使えることが最大の収穫であった。第1スタジオの奥に外部の騒音を防止するために、外壁に続いて空洞が設けられていた。この空洞の残響をエコーに活用することができたのである。／従来から、擬音の最も苦手としていた、幅のある音、迫力ある音も、エコーを使用することによって可能」<sup>16</sup>となったと述べている。この発言から新しい放送会館は、NHK大阪における創作の幅をそれまで以上に拡張したものと考えられる。

「大阪協同劇團」は1936年1月にゴリキー作の「エゴール・ブルイチョフ」によって第1回公演を開催しており、この舞台の装置を吉田太郎が担当していた。このころの吉田や新劇の関係者はNHK大阪において効果の仕事を引き受けており、吉田は「和田（註・精）さんから、従来のような仕事の在り方は、技術も身につかないし人も育たないので、局と契約をした専門家の効果グループを育成していきたい」<sup>17</sup>と打診を受けたという。

こうして1940年に効果団「音研社」が発足することとなった。しかし、国家による新劇への弾圧が起り、1940年8月には東京の新協劇團や新築地劇團、そして、大阪協同劇團などが強制的に解散させられることとなる。吉田は官憲から追われる身となったものの、1943年5月に音研社は発展的に大阪放送効果團へと移行し、NHK大阪にて培われた効果の技術は継承されていく。しかし、1944年3月には築地小劇場出身の和田もNHK大阪を解雇されてしまうこととなった。

## 7. 戦後のNHK大阪 芸術祭

1945年12月31日付で文部省の社会教育局に芸術課が設置され、初代課長には今日出海が起用された。今の発案によって1946年の秋から「芸術祭」が開催されることとなり、その趣旨は「芸術祭を開催して新日本文化再建に寄与すると共に国境を越へて現代日本の精華を海外に宣揚せんことを期する」<sup>18</sup>というものであった。1946年の第1回の芸術祭には、舞楽／能楽／人形浄瑠璃／演劇／歌劇／舞踊／音楽という7部門が設定されており、1948年に開催された第3回からは映画と放送の2部門が新設された。

さらに1951年度の第6回からは主催公演と参加公演の2本立てとしたうえで、大賞に相当する芸術祭賞（大賞に相当）と芸術祭奨励賞という2段階の賞が授与されるという基本

フォーマットが策定される。そして、1952年の第7回からは民間放送の参加も認められており、また、NHK大阪では1952年10月6日に放送された真船豊の作によるラジオ・ドラマ「秋の夜」を芸術祭へと出品している。こうして戦後の放送局では毎年の秋に開催される芸術祭に出品するため、芸術的／技術的に優れた作品を制作しようとする機運が高まっていったわけである。

その後のNHK大阪では、芸術祭の放送部門に1953年11月13日放送の「信濃にて」（北條秀司作、湯浅辰馬演出）、1954年10月22日放送の「カシオペヤの椅子」（土井行夫作、湯浅辰馬演出）、1955年10月21日放送の「八坂の塔の見える窓」（渋谷天外作、橋本忠雄／萩原講教演出）、そして、1956年11月30日放送の「不動」（郷田恵作、高島秀演出）といったラジオ・ドラマを出品していた。

これらの作品を制作したNHK大阪へ賞が贈られることはなかった。しかし、民放の新日本放送を舞台にラジオ・ドラマの制作に復帰していた和田精や、NHK大阪出身でおなじく新日本放送へ移った吉田悦造らが、この時期の芸術祭の放送部門において立て続けに賞を受けるという皮肉な結果を生んでしまう。そして、NHK大阪は1957年10月18日に放送された土井行夫の作、橋本忠雄の演出、齋藤超の音楽、吉川安二郎の効果、竹中英一の調整によるラジオ・ドラマ「日本ジプシー」によって、ようやく芸術祭奨励賞を受賞することとなる。

日本各地を渡り歩きながらの養蜂を営む親子の姿を描いたこのラジオ・ドラマに対して、20代半ばの齋藤は「小学唱歌のメロディをうまく取り入れてアレンジした抒情的」<sup>19</sup>な音楽を提供している。齋藤は Hammond・オルガンの奏者として、NHK大阪の制作によるラジオやテレビ番組へたびたび出演しており、「日本ジプシー」では Hammond・オルガンによる「赤とんぼ」などのメロディが挿入されているのを確認することができる。

その一方で1954年度からテレビ・ドラマも芸術祭の放送部門への参加が認められるようになり、1955年11月26日にNHKテレビから放送された内村直也の作、紙恭輔の音楽による「追跡」は、「東京、大阪をまたにける密輸団の犯人を追跡という筋で、スタジオ、ロケ現場を結んだ4元ナマ放送で、テレビの即時性を証明してみせた」<sup>20</sup>作品であった。この番組では総指揮と東京スタジオの演出を永山弘が、大阪スタジオの演出を岡本愛彦と和田勉が担当し、「追跡」は芸術祭賞を獲

16 註3、150～151頁

17 註3、152頁

18 文部省社会教育局芸術課編『芸術祭十五年史』文部省（1961年11月）2頁

19 橋本潤子、久保博 ラジオ『ラジオ名作劇場』解説 NHK第2ラジオ（1987年4月26日）

20 山下理介編『テレビ30年 週刊TVガイド別冊』東京ニュース通信社（1982年2月）16頁

得した初めてのテレビ・ドラマとなった。

その後のNHK大阪は、1956年11月19日に放送された「ひょうろ六とそばの花」(土井行夫作、岡本愛彦演出、和田勉演出助手、田中正史音楽)、1957年11月22日に放送された「石の庭」(有吉佐和子作、和田勉演出、古川太郎音楽)、そして、1958年10月26日に放送された「白い墓標」(茂木草介作、荒木順演出)といったテレビ・ドラマによって芸術祭奨励賞を受賞しており、とくに「白い墓標」では装置を担当した岩野音吉個人に対して奨励賞が贈られていた。

1958年10月24日に放送された「大阪鉦山」(小野田十三郎詩、小田和生作、萩原講教演出)や、1958年11月7日に放送された「海の審判」(藤本義一作、橋本忠雄演出)といったNHK大阪の制作によるラジオ・ドラマは芸術祭での受賞が叶わなかったものの、テレビ・ドラマが3年連続で受賞するという名誉によってNHK大阪という地方局は全国的な注目を集めることとなる。こうしてNHK大阪では芸術祭での受賞に向けて、ラジオとテレビの両面からの活発な作品の制作が進められていったわけである。

## 8. イタリア賞

1948年に「ヨーロッパ各国放送局の国際的協力に関するカプリ島の会議」<sup>21</sup>が開催され、このイタリア南部の島での会議にてイタリア放送協会は国際放送コンクールであるイタリア賞の創設を提唱した。1949年から1955年までのイタリア賞への出品は英語かフランス語で制作された番組に限られていたが、1956年からは翻訳をつければ言語は問わなくなったため、NHKにもイタリア賞への参加案内が届くこととなった。

1956年からNHK東京はイタリア賞への参加を開始し、1957年のイタリア賞に出品した「瓶の中の世界」(駒田信二作、三枝健剛演出、長谷川良夫音楽)によってイタリア放送協会賞(第2位に相当)を獲得する。そして、1958年には「言葉と音楽のための三つの形象」(秋山邦晴/岩田宏/伊藤海彦詩、武満徹/林光/入野義朗音楽、増井敬二演出)が大賞に相当するイタリア賞を受賞した。

こうしてNHKでは芸術祭だけでなく、イタリア賞での受賞を目指した作品の制作も推進されるようになっていく。NHK大阪も初めてのイタリア賞参加番組として、1959年7月7日に内村直也の作、萩原講教の演出、斎藤超の音楽、作本秀信の効果、奥田久雄の調整によるラジオ・ドラマ「マラソン」を放送している。このラジオ・ドラマは1960年夏に開催されるローマ・オリンピックに向けて、最終予選に出場している

ランナーの青年やコーチの心理がモノログを主体として描かれている。

萩原は「映画『危険な曲角』(註・マキシム・ソーリー音楽)からヒントを得てモダン・ジャズ」<sup>22</sup>を使用したと述べており、ビッグ・バンド「ニュー・サンズ・オーケストラ」が演奏を担当している。萩原によると斎藤による音楽がまず録音され、そのテンポをメトロノームで再現しながらランナーの足音の擬音や息遣いなどを同期させて収録が行われたという。なお、レースの終盤で主人公が心身ともに疲弊し混乱をきたすシーンでは、さまざまな打楽器によるミュージック・コンクレートふうの表現も確認することができる。

理事兼編成局長の島浦精二は1959年9月に開催されたイタリア賞に審査員として参加し、「『マラソン』は好評で(略)最後まで賞を争ったようである」<sup>23</sup>と述べている。萩原は「(註・ドラマ部門でなく)ドキュメンタリー部門でしたら入賞したであろうということは、当時、イタリーへ審査に行かれました現在の島浦顧問がそう当時おっしゃっていました」<sup>24</sup>と発言しているものの、この作品が賞を受けることはなかった。ただ、イタリア賞の審査会場での高評価が契機となり、内村によるとさまざまな言語に翻訳されて十五ヶ国での放送が行われたという。

## 9. 黒い僧院

NHK大阪は1959年の芸術祭の音楽部門へ11月14日に「コーラスアルバム」の枠から放送された松下真一「黒い僧院」と11月22日に放送された平岩弓枝の作による狂言「雪まろげ」を、ラジオ部門へ10月23日に放送されたラジオ・ドラマ「旅人」(今東光作、萩原講教演出)と11月4日に放送されたラジオ・ドラマ「空が小さい」(安川茂雄作、橋本忠雄演出、斎藤超音楽)を、そして、テレビ部門へ10月9日に放送されたテレビ・ドラマ「日本の日蝕」(安部公房作、和田勉演出、小倉博音楽)と11月20日に放送されたテレビ・ドラマ「平和屋さん」(遠藤周作作、前田達郎演出、林光音楽)を出品している。

これらの作品のなかで松下真一による「人声によるコンポジション『黒い僧院』」は、NHK大阪において制作された初の電子音楽となった。NHK大阪には大阪放送合唱団の演奏を放送する「コンサートエコー」「コーラストタイム」という番組枠があり、これらを引き継いで1954年4月11日から放送を開始した「コーラスアルバム」という番組枠は、1956年度から第2週をNHK大阪が担当して現代曲なども取り上げていた。

「黒い僧院」は北園克衛が詩を提供しており、荒牧亀太郎が

21 無記名(平石、豊田)「1954年度イタリア賞を獲得したラジオ・ドラマ『ミルクウッドの下で』について」『NHK文研月報』5巻5号(1955年5月号)3頁

22 萩原講教「演出メモ」日本放送作家協会編『放送作家 現代の放送ドラマI』日本放送作家協会(1963年4月)277頁

23 島浦精二「イタリア賞の制定」『電波時報』15巻1号(1960年1月)85頁

24 萩原講教「ラジオ『名作劇場』解説 NHK-FM(1965年9月29日)」

演出、徳尾野昌男が調整、山本季喜知<sup>すえきち</sup>／友清昭士／中川基行が録音、林昭次郎／田中文雄が機器製作、大阪放送効果音が具体音を担当し、南安雄の指揮、渡辺富美子のナレーション、大阪放送合唱団／大阪放送室内管弦楽団の演奏が使用されている。松下は「毎日の放送業務に二人だけを残し、あとの全員が参加した。(略)三カ月間ほとんど寝泊まりは放送局の中」<sup>25</sup>であったと述べており、NHK大阪初の電子音楽は手探りのなか人海戦術で制作されていたことが分かる。

松下はこの作品について「北園克衛氏の3部からなる、僧院という特殊な場を通しての人間の普遍的内在を追求する詩にもとづいた人声のためのcompositionである。人声、それは即ち人間であり朗読と合唱で表現されるが、イエズ・レデムブトールのキリエと御公現ミサのアレルヤが挿入される。これに対し外界を示す鍵盤打楽器群と具体音、及び超越者の象徴である電子音の群が対比し、それらが層的構造と拡大された音響空間の中に展開する。基本セリーは全曲を通じて唯1つであり、音価のセリーの1部には自然常数の展開が用いられている」<sup>26</sup>と説明している。

冒頭で触れたように黛敏郎は1955年からNHK東京において電子音楽の作曲を推進していた。しかし、黛は「十二音技法に端を発する音楽の抽象化の末に失われた人間性や民族性を、電子音楽という完成されたインターナショナルな言語を駆使して、東洋人の持つ感覚や思想に基づき新しい形で抽象して行く」<sup>27</sup>ことを目指すようになり、それまでの作風を変化させて1957年11月には能に題材を得た電子音楽「葵の上」を発表している。

松下も「黒い僧院」において詩を使用し、電子音には超越者としての役割を担わせ、さらに、松下自身も「『黒い僧院』の中の一部で特別の目的のために12平均率中の振動数を使用した事がある。勿論、この曲は純然たる『電子音楽』ではなかつたのである」<sup>28</sup>と発言している。すなわち、黛や松下はドイツでカールハインツ・シュトックハウゼンらが創始した、狭義の電子音楽の枠に留まることのない作品を志向していたわけである。

残念ながら「黒い僧院」は芸術祭にて賞を受けることはなかった。しかし、NHK東京の電子音楽スタジオが参加した三善晃の作曲による音楽詩劇「オンディーヌ」が芸術祭賞を受賞し、さらにNHK大阪の制作による2本のテレビ・ドラマ「日本の日蝕」を演出した和田勉個人と「平和屋さん」に対して芸

術祭奨励賞が贈られている。また「オンディーヌ」は改作のうえ、1960年のイタリア賞の音楽部門にてイタリア賞を獲得することとなった。

## 10. 1960年の松下真一

1960年10月に音楽之友社から発行された書籍「日本の作曲1960」に松下真一の作品表が掲載されており、1960年1月2日にNHK第1ラジオから「電子音と合唱のための作品」と「大阪童唄にもとづくインヴェンション」という作品が南安雄の指揮による大阪放送合唱団によって初演された旨が記されている。1960年1月2日の放送番組表から「新春コーラス」という番組において、松下の作曲による「五ツ木の子守唄(熊本民謡)」と「船場の手毬唄(なにわわらべうた)」という作品が放送されていたことが明らかとなった。おそらく「五ツ木の子守唄」という作品が「電子音と合唱のための作品」という題名へ変更されたものと考えられる。

松下は「音楽芸術」誌の1960年5月号に掲載された文章において、「白色雑音も重要であり、これもフィルター・カットを通して部分だけを取り出したり、中心サイクルの音階を設定して、その各中心サイクルの周辺だけを取り出したものが使用される。(略)NHKから委嘱された或る作品で、私が使用した中心サイクルの音階は(c/sec) 110、180、250、390、525、800、940、1100、2500、3900であつた。なお、白色雑音が合唱(アカペラ)とよく調和する事を附言して置こう」<sup>29</sup>と述べている。この記述は「電子音と合唱のための作品」についてのものと考えられ、この作品ではフィルターを使って帯域を制御したホワイト・ノイズも使用されていたことが分かる。

上野晃は「音楽芸術」誌の1960年12月号において、松下は「『黒い僧院』を契機として朗読・管弦楽・弦楽四重奏を用いた『ジェット・パイロット』や『斜光のなかのトルソ』をはじめとするテープ・ミュージックをかなりつくつた」<sup>30</sup>と述べている。1967年12月に発行された書籍「日本の作曲1961→67」にも松下の作品表が掲載されており、「ジェット・パイロット」の編成は「語り手、オーケストラ、弦楽4重奏、女声合唱」、作曲年月日は「1960年」、演奏場所は「NHK(大阪)」、演奏月日は「6月30日」、演奏者名として「久米明、大阪放送交響楽団、大阪放送合唱団、指揮岩城宏之」という記載がある<sup>31</sup>。

また、ミュージック・コンクレート「斜光の中のトルソー」

25 松下真一「天地有楽」音楽之友社(1991年12月)50頁

26 松下真一「黒い僧院」目黒三策編『日本の作曲1960 音楽芸術別冊』音楽之友社(1960年11月)196頁

27 川崎弘二編著『日本の電子音楽 増補改訂版』愛育社(2009年3月)744頁

28 松下真一「音階セリー及び電子音楽」『音楽芸術』18巻5号(1960年5月)27頁

29 註28に同じ。

30 上野晃「作曲家訪問 松下真一」『音楽芸術』18巻12号(1960年12月)37頁

31 目黒三策編『日本の作曲1961→67 音楽芸術臨時増刊』音楽之友社(1967年12月)25頁

の編成は「テープ」、作曲年月日は「1963年」、演奏場所は「NHK（大阪）」、演奏月日は「6月」、その他として「KPFA（註・カリフォルニアのラジオ曲）、l'ORTF（註・Office de Radiodiffusion Télévision Française フランス放送協会）などで放送」と記載されている<sup>32</sup>。これらの2作品については、NHK大阪に所蔵されている資料や放送番組表などからの情報を得ることができず、その詳細は不明である。

1960年の芸術祭にNHK大阪は、ラジオ部門へ1960年11月21日に放送された今東光の作、萩原講教の演出、松下真一の音楽による「帰らぬ人」を、そして、テレビ部門へ1960年10月21日に放送された「自由への証言」（椎名麟三作、和田勉演出）と1960年11月18日に放送された「それが言えない」（藤田敏夫／藤本義一作、荒木順演出）を出品しており、「自由への証言」に対して芸術祭奨励賞が贈られている。なお「NHK年鑑」の1962年版によると、「帰らぬ人」にはミュージック・コンクレートが使用されていたようである。

## 11. 遙かなる旅路

NHK東京にて電子音楽の制作を強力に進めていたプロデューサーの上浪渡は、1960年から1961年にかけてNHK大阪へと赴任する。1961年1月26日に吉井勇の作、上浪渡の演出、松下真一の音楽によるラジオ・オペラ「雨夜の品定め」が放送され、1961年6月には野上彰の詩、上浪渡の演出、柴田南雄の音楽による音楽物語「ローマへの道」が完成している。上浪は「ローマへの道」について「天正の少年使節をあつかった作品だったが、この中でも、鎖国を表現するために短いコンクレートが使われている」<sup>33</sup>と述べている。このように多少は上浪もテープによるコンポジションを番組へ導入していたようではあるが、NHK大阪にて本格的な電子音楽を制作することはなかった。

1961年10月19日に田中千禾夫の作、萩原講教の演出、松下真一の音楽によるラジオ・ドラマ「韻律」が放送されている。放送当日の新聞記事では「一人の青年の不安と孤独をさまざまな音の韻律とからませて表現したもの。／主人公は長崎で原爆にあい、一人ぼっちになったという青年だ。（略）その彼が俳優学校の入学試験を受ける。リズム感のテストで、音楽に合わせて歩きはじめる彼の頭に過去の経験や感情がかけめぐる。行進曲で教育勅語、曲が早くなってオートメ工場から満員電車、ワルツ曲でゲーテの詩、電子音楽で原爆をあつかった原民喜の詩を連想する」<sup>34</sup>と記されており、この作品では効

果音的に電子音楽が使用されていたようである。

1961年11月19日には矢代静一の作、武田俊雄の演出、黛敏郎の音楽、堂下昭博の効果、徳尾野昌男の調整により、NHKラジオ第1放送と第2放送を利用した立体放送による「劇的カンタータ『遙かなる旅路』」が芸術祭の音楽部門への参加番組として放送された。この作品の台本には「衣川の館で、義経は最後を迎えようとしている時、三十一年の短いがはなばなしかつた生涯を思い起こしている。（略）義太夫の三味線、能のはやし、歌舞伎の下座ばやしなどを素材とし、更に形成加工したミュージック・コンクレートを主体とした音楽を使用している」と記されている。

「遙かなる旅路」では謡の再生速度の変化、逆再生による弓矢の効果音、打楽器へのフィルターやエコーの付加、梵鐘によるミュージック・コンクレート、そして、義経の最後の場面に流れる複数の電子音を合成した「荘厳のしらべ」などの音響が使用されている。しかし、芸術祭の審査を担当したと思しき人物によって台本に記された手書きの評では「立体放送もコンクレートも余り活用されていない／黛の創作なし／素材の寄せ集め／カンタータと云い乍ら歌ほとんどなし」などと、この作品の問題点を的確に指摘している。

芸術祭において「遙かなる旅路」は賞を受けることはなく、テレビ部門へ出品された1961年11月4日放送の「おばあちゃんの神様」（土井行夫作、前田達郎演出）と1961年11月21日に放送された「王国のブルース」（白坂依志夫作、荒木順演出、三保敬太郎音楽）のうち、前者に対して芸術祭奨励賞が贈られている。なお、1961年3月17日に受賞者が決定した第1回の日本放送作家協会賞において、和田勉は「放送理論とその実践に対して」という理由により、「放送界に特に顕著な功績のある人」<sup>35</sup>に贈られるTRG賞（TRGは日本放送作家協会の略称）を受賞している。そして、1961年の冬に和田はNHK東京へ移ることとなった。

## 12. 山はこわくなかった

1962年7月7日に土井行夫の作、萩原講教の演出、斎藤超の音楽、作本秀信の効果、竹中栄一の技術、大阪放送管弦楽団と大阪放送合唱団の演奏によるラジオ・ドラマ「山はこわくなかった」が、イタリア賞のドラマ部門参加作品として放送された。放送当日の新聞記事には「奈良県吉野の大峰山系の原生林で迷い子になった四歳の坊やが、まる五昼夜ぶりに助けだされた事件をもとに土井行夫が書きおろしたもので（略）

32 註31に同じ。

33 上浪渡「柴田南雄とテープ音楽」『ポリフォーン』13号（1993年12月）141頁

34 無記名「音で現わす思想と感情」『朝日新聞 大阪版』（1961年10月19日）9面

35 内村直也「協会賞設定から受賞者のきまるまで」『1961』日本放送協会（1961年）2頁

彼が生きのびたのは、幼児の本能で原生林の中の動物たちと  
とけ合った生活をしていたからではなかろうか<sup>36</sup>と記されて  
いる。

主人公の子供が山で迷子になるシーンなどには、声による  
コラージュ、ホワイト・ノイズによって作成されたと思しき  
風の音、単純な電子音による虫の声、テープ編集による動物  
の鳴き声などが登場し、さまざまな効果音も細かく配置され  
ている。1962年のイタリア賞においては、7月8日にNHK東  
京の制作により放送された立体放送劇「火の山」（井上靖原作、  
田甫一郎演出、林光音楽）へイタリア賞が、そして、「山はこ  
わくなかった」へイタリア放送協会賞が贈られることとなっ  
た。ただ「山はこわくなかった」における斎藤の音楽は比較  
的穏当なものであり、とくに効果音が高く評価されていたよ  
うである。

NHK大阪は1962年の芸術祭において、音楽部門へ10月31  
日放送の松下真一「交響曲『交響的祈り』」と11月1日放送の杵  
屋正邦「『三つの倉の物語』正倉院によせる詩と音楽」を、ラ  
ジオ部門へ11月11日放送の「あの天にかかる橋」（木下順二作、  
萩原講教演出、斎藤超音楽）を、そして、テレビ部門へ10月  
19日放送の「ワイシャツ」（藤田敏夫作、山田勝美演出、松下  
真一音楽）を出品している。しかし、いずれの作品も賞を受  
けることはなかった。なお、書籍「日本の作曲1961→67」の  
作品表によると、松下は1962年にミュージック・コンクレート  
「極」をNHK大阪において制作し、同年5月に大阪の毎日ホー  
ルにて初演しているようである。

### 13. 生命の火

NHK大阪は1963年の芸術祭に、音楽部門へ10月25日放送  
の六代目鶴澤寛治「義太夫『碁盤太平記』墨譜による復曲」と  
11月17日放送の藤本義一の作、木村明男の演出、斎藤超の音楽、  
堂下昭博の効果、吉井幸次の技術による「立体音楽『生命の  
火』」を、ラジオ部門へ11月23日放送の「踏切の目」（茂木草介  
作、香西久演出）を、そして、テレビ部門へ11月1日放送の「水」  
（岸宏子／鶴野昭彦作、荒木順演出、田中正史音楽）を出品し  
ている。

1963年12月に開催されたNHKの調整技術改善委員会の資  
料では、『生命の火』は人間の身体の中を一つの世界とみて、  
これを立体音楽として表現しようというものである。（略）曲  
は三部に分れ、初めの部分は、オーケストラと効果音でまわ  
りからみた人間、二つの眼で見、二本の足で歩く、人体を描  
いている。真中の部分は主としてコーラス、パイプオルガン、  
効果音で人間の内部を探ぐるコンクレートである。終りの部  
分は再びオーケストラと効果音で生命の力強さ、神秘性、複

雑性をうたいあげたものである」と記されている。

また、使用された素材として「電子音としては正弦波、ホ  
ワイトノイズ、クリック、etc、コンクレートとしてはオンド  
マルトノ、パイプオルガン、パイプホーン、呼吸音、心臓音、  
水泡、コップ、etc、をフィルター、エコライザー、テーブ録  
音機等により加工した」と解説されている。しかし、この年  
のNHK大阪の出品したいずれの作品も、芸術祭において賞を  
獲得することはなかった。

なお、「Electronic Music Review」誌の1967年4/7月号はそ  
れまでに全世界で制作された電子音楽の浩瀚なカタログとし  
て出版されており、松下真一が1963年にNHK大阪で「Fantasie  
sur les nombres, for narrator, chorus, orchestra and elec-  
tronic sounds」という作品を制作した旨の記載がある。しか  
し、この作品についての情報も今回の調査で得られることは  
なかった。

### 14. 死刑台上の鎮魂曲

1964年7月1日には木原孝一の詩、垣田昭の演出、松下真一  
の音楽、徳尾野昌男の技術による「死刑台上の鎮魂曲『愛と  
死の三章』」が放送されている。この作品は桜田千枝子／溝田  
繁のナレーション、北森和子／安達昭平の独唱、外山雄三の  
指揮による大阪放送管弦楽団と大阪放送合唱団の演奏による  
もので、書籍「日本の作曲1961→67」に掲載された松下の作  
品表によるとミュージック・コンクレートも使用されていたこ  
とが分かる。

番組の放送解説ではこの作品について「これは死刑台に歩  
む一人の男に、現代の人間の悲劇的な存在を象徴したもので  
す。第1章は死刑台に通じる暗い廊下を歩む男の深層心理の  
展開です。（略）第2章は男の愛の回想と苦悩を、砂漠に水を  
求める喜びと一羽の引き裂かれた鳥の悲しい運命に寄せて描  
きます。（略）第3章はふたたび死刑台に歩む男の場面に帰り、  
人間の死と浄化を歌い上げます」と説明されている。なお、  
この作品においてミュージック・コンクレートは前面に押し出  
されてはおらず、あくまで効果音的な使用に留まっている。

NHK大阪は1964年の芸術祭に、音楽部門へ11月22日放送  
の石川渾月の作、二代目野沢勝太郎の作曲による「ラジオの  
ための義太夫『こがれ火』」を、ラジオ部門へ10月27日放送の  
「ニューヨークの日本人」（茂木草介作、山田勝美演出、斎藤  
超音楽）と11月17日放送の「漫才師と切支丹」（田中千禾夫作、  
久保博演出）を、そして、テレビ部門へ11月21日放送の「兎  
追ひし」（茂木草介作、関口象一郎演出）を出品しており、「漫  
才師と切支丹」に対して芸術祭奨励賞が贈られている。

萩原講教は斎藤超について「心臓肥大症という病気で一時

36 無記名「子供の感覚を描く」『朝日新聞 大阪版』（1962年7月7日）9面

入院しておられた関係もあるんですけど、非常に意欲を持って、そして、スタジオへ来て、当時、電子音楽、電子音楽と言えるかどうか、電子音楽ふうですか、そういうものを副調で、調整室で作るわけですけども、病苦をおして酸素吸入器を副調へ持ち込んでやったという。たいへん意欲的にやられたんです<sup>37</sup>と述べている。しかし、齋藤は心臓の病気が悪化し、1965年5月16日に33歳の若さで逝去してしまうこととなる。

さらに松下もハンブルク大学国立理論物理学研究所の研究員へと就任しており、1965年5月にマドリッドにて開催された国際現代音楽協会の演奏会へ参加していることから、遅くともこの時期までに松下は渡独していたものと考えられる。

NHK大阪における電子音楽の制作は齋藤や松下の存在のもとで推進されていたわけであるが、肝心の作曲家を相次いで失ったことによって、その歩みはこの時点で途絶えてしまうこととなった。

## 15. おわりに

本調査によって、芸術祭やイタリア賞というコンクールを舞台として推進されてきた電子音楽の創作の軌跡の一端が、NHK東京だけでなくNHK大阪においても明らかになったものと考えている。なお、1968年以後のNHK東京における電子音楽の創作と、その歴史的意義については調査・研究を継続する予定である。

---

37 笹谷清子、土井行夫、萩原講教、湯浅辰馬 ラジオ『ラジオ名作劇場 関西作家シリーズ4』解説 NHK第2ラジオ（1983年8月28日）